

竹と櫓 一（五百字）

強い風がふく日に、竹林を見たことがあるだろうか。竹は、大きく曲がりながら、風をやりすごす。風がやめば、また何ごともなかったように立っている。いっぽう、硬くて太い木が、風でたおれたり、えだを折られたりすることもある。強いとは、どういうことだろうか。

ふつつ、強いとは、太く、硬く、大きいことだと思われる。櫓は、とても硬い木だ。木のなかでも重く、道具の柄や木刀に使われるほどじょうぶである。多くの人は、曲がらない櫓のような木こそ強いと考えるだろう。

しかし、折れずに形を変えるもののほうが生き残る。硬いものは、思いがけない大きな力に一度で折れてしまう。いっぽう、しなるものは、その力を受け流す。受け流せば、力はそのまま通りすぎていく。竹は中が空どうで、櫓のように硬くはない。けれども、風がふけば大きくしなり、風がやめばまたまっすぐにもどる。力に正面からさからわず、受け流すことで、竹は折れずにすむのである。

こう考えると、本当の強さとは、硬くて曲がらないことではない。大きな力を受けてしなり、また元の形にもどれること。それが、折れない強さなのである。竹は、硬さではなく、しなやかさによって風に勝っているのである。

課題一 筆者の主張を一文で書こう。

課題二 一般論の段落は何段落目だろう。（ ） 段落目

竹と櫓 二（八百字）

強い風がふく日に、竹林を見たことがあるだろうか。竹は、大きく曲がりながら、風をやりすごす。風がやめば、また何ごともなかったように立っている。いっぽう、硬くて太い木が、風でたおれたり、えだを折られたりすることもある。強いとは、どういうことだろうか。

ふつう、強いとは、太く、硬く、大きいことだと思われる。櫓は、とても硬い木だ。木のなかでも重く、道具の柄や木刀に使われるほどじょうぶである。多くの人は、曲がらない櫓のような木こそ強いと考えるだろう。

しかし、折れずに形を変えるもののほうが生き残る。硬いものは、思いがけない大きな力に一度で折れてしまう。いっぽう、しなるものは、その力を受け流す。受け流せば、力はそのまま通りすぎていく。竹は中が空どうで、櫓のように硬くはない。けれども、風がふけば大きくしなり、風がやめばまたまっすぐにもどる。力に正面からさからわず、受け流すことで、竹は折れずにすむのである。

大きな台風が通った次の朝、山を歩く。硬くて太い木が、根もとからたおれていたり、太いえだを折られていたりする。硬い木は、風に正面からさからう。風の力がその木の硬さをこえたとき、木は一度に折れる。いっぽう、竹林の竹は、台風の夜、地面につきそうなほど曲がって風を受け流す。そして次の日には、また元のように立っている。竹は中が空どうで、節があり、軽い。だから、大きくしなつても折れにくい。硬い木は、たおれるまで曲がらない。竹は、たおれる前に曲がる。硬さで風に勝とうとせず、曲がることで風に負けない。それが竹のやり方である。

本当の強さとは、硬くて曲がらないことではない。大きな力を受けてしなり、また元の形にもどれること。それが、折れない強さである。次に強い風の日に竹林を見たら、大きく曲がる竹の姿が、少しちがつて見えてくるだろう。

課題一 筆者の主張を一文で書こう。

課題二 一般論の段落は何段落目だろう。（ ） （段落目）

竹と檜 三（千二百字）

強い風がふく日に、竹林を見たことがあるだろうか。竹は、大きく曲がりながら風をやりすごし、風がやめば何ごともなかったように立ち直る。いっぽう、硬くて太い木が、同じ風でたおれたり、えだを折られたりすることもある。強いとは、いったいどういうことなのだろうか。

ふつつ、強いとは、太く、硬く、大きいことだと思われる。檜は、日本の木のなかでも特に硬い木である。重く、きめが細かく、道具の柄や木刀に用いられるほど丈夫だ。多くの人は、どんな力にも曲がらない檜のような木こそ、強さの見本だと考えるだろう。

しかし、折れずに形を変えるもののほうが生き残る。硬いものは、思いがけない大きな力が加わると、一度で折れてしまう。これに対して、しなるものは、その力を受け流すことができる。竹は中が空どうで、檜のような硬さはもたない。けれども、風がふけば大きくしなり、風がやめば元の形にもどる。力に正面から対抗するのではなく、受け流すことによって、竹は折れずにすむのである。

たとえば、大きな台風が通過した翌朝の山を歩くと、硬くて太い木が、根もとからたおれていたり、太いえだを折られていたりするのを目にする。硬い木は、風に正面からさからう。風の力がその木の硬さの限度をこえた瞬間、木は一度に折れる。これに対して、竹林の竹は、台風之夜、地面につきそうなほど曲がって風を受け流す。そして翌日には、また元のように立っている。竹は中が空どうで、節があり、軽い。そのため、大きくしなつても折れにくい。硬さで風に勝とうとせず、曲がることで風に負けない。それが竹の生き方である。

雪の多い地方の冬。重い雪が積もると、竹は雪の重みで弓のように曲がり、先が地面につくこともある。しかし、雪が落ちれば、竹はまた起き上がる。これに対して、硬い木のえだは、雪の重みに耐えつづけ、ある限度をこえた瞬間に、音を立てて折れてしまう。「柳に雪折れなし」ということわざがある。やわらかく曲がる柳のえだは、雪の重みで折れることがない、という意味だ。昔の人も、しなやかなものが雪に耐えることを、経験から知っていたのである。硬さは、限度をこえるまでは頼もしい。だが、限度をこえた先には、折れるという結末しか残されていない。

本当の強さとは、硬くて曲がらないことではない。大きな力を受けてしなり、また元の形にもどれることこそが、折れない強さなのである。もちろん、檜の硬さにも価値はあり、道具の柄として長く使われてきたのはそのためだ。けれども、思いがけない力の前で生き残るのは、硬いものではなく、しなやかなものである。曲がることは、負けることではない。折れないための知恵なのである。

課題一 筆者の主張を一文で書こう。

竹と檜 三（千二百字）（課題のつづき）

課題二 一般論の段落は何段落目だろう。（ ） 段落目